



<https://douzou.jp/>

隼人族の森を渡る風

彫刻家 上床 利秋

連載エッセイ 第 118 回

書齋にて



上段は外国人作家の洋書、
下段は邦書を集めた彫刻専門書

本によっては
開くとばらばらになってしまう



私の最も心安らぐひと時は、今まで買い求めた美術専門書を収めた本棚の前で椅子に座っている瞬間だ。私は大学入学当初から国の内外を問わず、彫刻に関する本を世界中の美術館や展覧会場でコッコツと買い集めてきた。美術本は写真が多いため、規格外に大きかったり、重たかったりする。けれども、本を買うとその作家さんを理解できる気がして、旅行中にもかかわらず、つい買い求めていた。旅先での本は特に重たく感じていたけれど、旅した価値をそれを感じて、いつも嬉しかった。

その繰り返しでずいぶんと集まった。本が大きいので、木工所に頼んで特注でこっつい書棚をつくらざるを得なくなった。

一冊一冊がそれらを手にした場所やその時の私の記憶そのものだ。それぞれの作家さんに対する想いは自分が歳を取るにつれて変わってきたけれど、どの本も私の彫刻家人生の貴重な思い出であり、宝物になっている。

その中でも学生時代に手にしたミケランジェロの本はこれまで何百回開いてみたのだろう、ボロボロになってしまった。本の間には粘土の粉や大理石の粉まで紛れ込んでいる。

真夜中一人でそと本を開くとき、以前より理解は深まりつつも、その芸術家に対する尊崇の心は今でも五十年前と少しも変わっていない。

2026年10月